子どもの写真に見る大人の眼(2)

―写真を楽しむ行為から―

荒川　志津代

先日十代の人たちが語っていた。彼らは、装飾のきれいなケーキや花やペットなど、「かわいい」と感じたものは何でも、携帯電話機で撮る。しかも、「撮るだけ」であるらしい。電子メール機能を使って友達に送ることもあるが、それは撮ったもののうちのごく一部であるようだ。大半は電子的に保存されることもなく、やがて消去される。

どうやら写真は、記録するためだけに存在するのではないようだ。

デジタルカメラの普及がこのような写真行為を促進してはいるが、写真はそもそも、「撮る」こと自体にも楽しさがあった。そしてさらに、プリントして眺めたり、加工したり、友人知人に送ったりして楽しむ。今回は、そんな日常の楽しみとしての私的

写真行為を考える中から、子どもへの眼差しを考えてみたい。

一．撮る・捕らえる

「写真を撮る」という行為を衝き動かしているものについて解明しようとしたティスロンは、写真について次のように言っている。「写真と世界との関係をなすものは、心のはたらき自体がそうであるように、連続性であると同時に非連続性でもあり、捕獲であると同時に潜入でもあり、融合であると同時に分化でもある[1)]」

つまり、写真を撮る時、一定の枠（フレーム）の中で対象をくくるのは、世界の中からフレームの中の世界を分断して、捕獲することであるのだろう。それは同時に、その一瞬、フレームの中の世界に潜入し、融合することでもある。フレームの中の世界をそのまわりの世界とは分化させるのだ。そのように考えると、「かわいい」ものを何から何まで写真に撮ってしまう若者は、その「かわいい」世界に「潜入」し、「捕らえ」るつもりなのだとも思われる。感じたものを捕獲する楽しみといってもよいかもしれない。

私たちの日常においては、花の美しさ、ペットや子どもの愛らしさ、家族愛等への小さな感動は、とりあえず捕獲したい感覚であるのだと思われる。

女子高生の間でのプリクラの流行について、かつてある週刊誌が、「幸せ」の「捏造」と分析したことがあった。確かに、顔をぎゅっと寄せ合った小さなフレームの中では、〈こんなに仲良しな私たち〉が、捕らえられている。現実よりはるかに「幸せ」な私たちが捕獲されているのだ。

そして最近では、その捕らえたい感覚の世界は、シャッターを切る瞬間のみに依存するのでなく、加工によって、新たに創り出すことも可能になった。無理して捕獲しなくても、別の手段で表現出来るようになったということでもある。写真1では、赤ん

▲写真1　宇宙を示す絵と合成されて“舞い降りてきた”赤ん坊

坊の写真が宇宙を示す絵と合成されて、舞い降りてきた子どもといった感動を表現しようとしている。

加工はまた、鋏と糊とペンで、物理的に行われることも多い。写真が切り分けられ、再構成される。そのような加工によって、子どもへの感覚は、捕獲されやすくなったというべきだろうか。「捏造」されやすくなったというべきだろうか。

二．非日常としての撮影場面

写真を撮影するという名目は、日常とは異質な場面や人間関係を作ることが出来る。このことは、こうあったらよいという映像（絵）を求めることとともに、写真撮影の一つの動機になりえているように思われる。

(1)名目としての撮影

柳美里の戯曲「魚の祭り」では、写真が重要な道具立てとして使われている。作品の始まりも終わり

も、写真撮影の場面である。中ほどでは、死んだ次男のノートに、千切られた十六年前の家族写真が挟み込まれてあった場面がある。この作品は、この次男の死による葬儀のために、家族が集まっている様子を描いたものである。長年会うこともなく、お互いの生活状況もよくは知らず、お互いに対して複雑な思いを抱いている家族であったが、葬儀の後の最終シーンでは、「写真撮りたいな。」「あたし、カメラ持ってるわよ。」「背の大きい順番に並んで。」といった会話で終わるのである。

この最後のシーンでの写真撮影は、家族の和解ともとれるが、長年にわたる確執がそう簡単に解けるものだろうか。家族のあり方に傷ついていたらしい次男を失った今、互いの心境は、確かに少しは変化した。葬儀を終えては、そこそこ家族らしくもありたいという思いを持ち、その思いを確認するための写真撮影であるように見える。もっともらしい家族写真の映像を得ることと同じくらい、撮影場面での、仲の良い家族のような行為そのものが、求められたのだと思われる。

▲写真2　1912年　永田富太郎　日本写真家協会『日本写真史1840-1945』（平凡社、1971）より

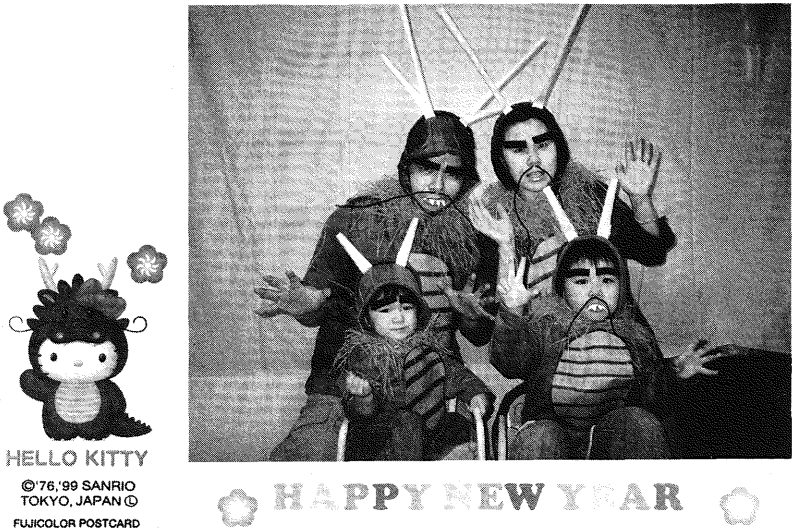
(2) ハレの体験

家族写真のみならず、子どもを撮影する場面そのものが日常と異質であることは多い。

例えば写真館である。子ども専用スタジオを備えた写真館での撮影は、あれこれ着せ替えたり、それにふさわしい小物をアレンジしたりする体験そのものも、魅力のようだ。女児の撮影に訪れたある母親は、「何しろシンデレラとかいろんなものになれて楽しいんです。夢の世界だから」と言う。そしてその夢を、絵として定着させるためには、プロの撮影技術と修正があった方がよいというわけだ。このようなスタジオは、子ども専用写場として、婦人用とともに大正期にはすでに見られた[2]。夢の子ども像を演出するための場ではあるが、例えばそこで木馬に乗ったり（写真2）、そんな写真を撮るために子どもを写場に連れていくその体験自体が、日常とは距離がある。そしてそこでの体験は、出来上がった写真とともに、子どもを見る新たな視点を提供するものであっただろう。

今日では、家庭の中でも非日常を体験出来る。写真3（次頁）の年賀状写真では、四人の家族が何やら扮装をしているが、よく見ると、葉書の隅に描かれているハローキティの、竜のイラストにならって扮装したものであった。つまり、ありあわせの写真を賀状にしたのではなく、出す予定の葉書に合わせて、わざわざ年賀状用に撮影したものである。この家族は、毎年、賀状写真のために一家でこのような取り組みをしている。この数年は簡略化し、パソコン上で合成して作ってしまうらしいが、子どもたちが「嫌だ」と言い出すまで、家族の行事として続けたいとのことであった。ここでは、撮影された写真もさることながら、撮ること自体に意味がある。家族の一体感を形成する体験イベントになっているのだ。

写真を撮影するその時の体験が意味を持ち、そこでは、子どもと大人が一緒に体験を楽しんでいるこ



▲写真3　ハローキティの竜のイラスト(左)と竜に扮装した家族(右)

とを見てきた。「子どもを撮る」時、必ずしも子どもは、特別な位置を与えられているばかりではなさそうだ。

三．外へ発信

ピエール・ブルデューの研究によれば、家庭に子どもがいることと写真機の保有との間には、きわめて密接な関係が存在するとのことであった[3]。今日では、写真機の保有のみならず、写真撮影行為との間にも密接な関係が存在するように見える。

例えば写真を人に見せたり、人に送るということでは、人物写真の場合、小さな子どもまたは、子どもと若夫婦の写真が圧倒的に多い。年賀状の場合、思春期以降の子どもの写真や、大人だけの家族写真は極めてまれである。小さな子どもとの写真は、友人知人に送ったり、コミュニティ情報誌や育児関連の雑誌に送ったりして、いわば、みせびらかす写真なのである。投稿写真用のページが用意されている

雑誌も多く、子ども写真や子どもと親の写真が、誌面いっぱいに並んでいる。子どもと一緒にいる「私」を楽しみ、アピールしている写真も多い。どれもこれも、失礼ながら似たように見えるけれども、一枚一枚をよく見ると結構おもしろい。

かつての、記録という意味あいの強かった子どもや家族の私的写真では、子どもと自分との関係性や、その場面のエピソードなどの文脈（コンテクスト）抜きには、捕らえられた世界を理解することは難しかった。家族写真が、コンテクストを理解しているものにとってのみ意味があり、関係のない他人にはさしておもしろみのない、どれも似たような写真である理由はそこにあった。そのような意味では、かつての子ども写真は、個々人または家族の内へ、求心力をもつものであったと言えよう[4]。

ところが現在、外に向けて発信される写真では、コンテクストはさほど重要でないように見える。今、楽しいこと、今、かわいいこと、今、しあわせなことが、重要なメッセージであるようだ。そのような意味では、時系列も重要ではなくなっている。

子どもとの写真行為は、楽しく消費するものとなったようだ。それは私たちの日常における生活の反映であり、子どもとの関係の反映でもある。

（名古屋女子大学）

注

1) セルジュ・ティスロン（青山勝訳）『明るい部屋の謎』（人文書院、二〇〇一）、一八五頁。

2) 亀井武編『東京都写真美術館叢書　日本写真史への証言　上巻』（淡交社、一九九七）、一三八頁。

3) ピエール・ブルデュー監修（山縣熙・山縣直子訳）『写真論―その社会的効用』（法政大学出版局、一九九〇）、三四一頁。

4) 荒川志津代・山下恒男「家族写真における子ども」『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学、芸術）』第47号、一九九八、一八二頁。